

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第11章 祈りについてのパウロ その1④



思い煩わず祈る 指導者たちのための祈り



思い煩わず祈る

ローマのクリスチャンたちは奨励を与えられています。「**悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい**」（ローマ 12:21）。ピリピのクリスチャンには、同じアドバイスがもっと具体的なものとなっています。困難な状況に直面しても、うまくやるように言われているのです。「**何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます**」（ピリピ 4:6-7）。

ピリピの教会に宛てたこの手紙の、その中心的な要素は**喜び**です。しかし、本当に必要とされていたものは、**励まし**でした。パウロは投獄されていたからです。ピリピのクリスチャンたちは、自分たちに敵対的な世界の中で苦しんでいました。また、彼らを惑わして偽りの福音に従わせようとする偽教師たちもいました。しかしそれでも、パウロは「何も思い煩わないで」と語ることができました。「思い煩う」とは、ギリシア語の「メリムナオー」で、「～について心配する」「不当に心配する」、あるいは「何かについて、気持ちが散漫になるほど気をもむ」という意味です。「何も……」というのは、奨励において中心的な強調点が提示される形です。というのも、文頭に「メーデン」という言葉が来ているからです。「何も！思い煩うな」というわけです。ただの一つのことも、です。

私たちは、心配ごとや懸念を持たずにはいられない存在です。仕事は、健康は、愛する者たちは、仲間のクリスチャンたちは……心配ごとばかりです。しかし私たちは、まるでその重みがすべて自分にかかっているかのどとくに悩まされてしまうべきではないのです。

もっとも、思い煩うなど戒めるのは、あまり適切なことではありません。ますます大きな心配を抱かせるだけだからです。そこには何か良い対処法を提供しなければなりません。そこでパウロは、不安を克服するための手段を与えています。「あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」(4:6)。感謝を捧げることは、あらゆる祈りの本質的な要素であるはずですが、それは、神が既に為してくださったことへの感謝を表す手段であり、祈りに答えて為してくださるものと期待していることへの信仰を表す手段なのです。神は、私たちの祈りに応答する形で行動を起こしてください。「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられる」(マタイ 6:8) という事実は、神に感謝を捧げるための、もう一つの理由です。というのも、神は常に、祈りに対し、その背後にある本当の必要を満たす形で答えてくださるからです。また同時に、確かなことは、神への願いを言い表すようにと願っておられるのです。私たちが祈り求めるのは、神に新しい情報を提供するためではありません。むしろ、願っているものを神の御手からいただくのだという信仰を働かせるためなのです。

そのような祈りは、私たちの不安を生み出す懸念への答えを得るだけではありません。「神の平安」という、神の子どもならば誰もが体験すべき心の状態を生み出すことにもなるのです。これは「神の平安」として表現されている、魂の深い内面の安息です。というのもそれは、神によって与えられ、保たれているからです。そしてそれは、「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です」(ローマ 8:6) とあるように、霊的なものの見方から生まれてきます。平安というのは、不安が懇願と祈りに置き換わることによる、恵みの果実です。「志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです」(イザヤ 26:3)。祈りには、神の平安という報いが与えられますが、その平安とは「人のすべての考えにまさる」(ピリピ 4:7) 平安なのです。

これは、信仰の無い人々には理解を超えたものです。彼らはこれを感じることができません。また、クリスチャンの理解を超えたものでもあります。この恵みの体験を享受しているクリスチャンですら、自らの暗闇に、そのように神秘的ながらも現実的な形でどのように光が差し込んでくるのか、すなわち、言葉では説明しがたい心の静けさをもたらしてくれるのかを、十分に理解することはできないからです。

「神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」。ギリシア語の「フルーレオー」(「保つ」ないし「守る」)とは軍事用語で、守備隊の全体によってなされる防御を表します。この言葉は、クリスチャンが自らの心配をすべて神の御手にお委ねする時に体験する安心感を表現しています。これは単なる守り以上のものです。聖霊が私たちの心と思いとを注意深く見張りながら守ってくださっているのであり、私たちの内なる平安が、心煩わされるような影響力にいつさい晒されることなく、かき乱されることのないようにしてくださっているのです。R・フィンレイソンが昔の注解者のアドバイスを伝えてくれています。

問題や不安で思いが一杯になったりあふれたりするなら、神の臨在の内に入りなさい。神の前

に自分の状況を詳しく語るのだ。神はあなたの心の願いの数々を知っておられるが、自分は追い求められる者となると宣言しておられる。求めてくれ、あなたのために願いをかなえる者となろうと言っ
てくださっているのだ。それゆえ、この神の臨在の中に行きなさい。神は、あなたの霊に瞬時に平安
を与えてくださり、願うものを与えてくださり、あるいは、願うものは与えずともあなたをそれ以上
に幸せにしてくださる。また、信頼するならば永遠の慰めなる方となってくださるのである。神はあ
なたの魂に平安を吹き込んでくださり、この上ないほどの嵐のただ中であって、安穩を命じてくださ
るのである。

祈りと願いに答える形で聖霊が取り次いでくださる神の平安は、「あなたがたの心と意思をキリスト・イエス
にあって守って」くださるのです。

指導者たちのための祈り

良いアドバイスというものは、何度も繰り返されてしかるべきものです。コロサイとエペソのクリスチャン
たちは、祈りについて同じ励ましを必要としていました。一世紀のコロサイとエペソのクリスチャンに有益な
ことは、今日の世界中のクリスチャンにとっても依然として有益です。

ここで、コロサイ人への手紙4章214節とエペソ人への手紙6章略1 岨節の類似性に注目してみましょ
う。

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。同時に、私たちのためにも、神がみことば
のために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥
義のために、私は牢に入れられています。また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり
語れるように、祈ってください。(コロサイ 4:2-4)

ここで「たゆみなく」と翻訳されているギリシア語は「プロスカルテレオー」ですが、「～において忍耐す
る」「～に多くの時間を費やす」、あるいは「人や物に関して、継続的に、変わらずにいる」という意味を表し
ます。この語は、使徒の働き1章14節でも用いられており、弟子たちが、罪を犯したユダの代わりになる人
を選ぶ直前に、共に集まり祈っている場面を描写しています。イエスご自身も、重要な決断や任命をする前には
祈りに一晚を費やしておられました(例、ルカ 6:12 とマタイ 26:36-44)。同じ言葉はまた、ローマ人への手紙
12章12節、パウロがクリスチャンに「**祈りに忠実に**」あるよう勧めている箇所でも用いられています。

「目をさまして」は、「目を覚ましている」「霊において気をつけている」「用心深くいる」という意味のギリ
シア語「グレーゴレオー」の翻訳です。イエスも同じ言葉を、眠っているペテロ、ヤコブ、ヨハネに「**目をさ
まして、祈っていなさい**」(マタイ 26:41) とたしなめる際にお用いになりました。ここでのメッセージは単純
にして直接的です。常に祈っていなさい、心を祈りの主題にしっかりと合わせていなさい、気が散ってしまっ
て、その結果、目的から逸れてしまわないようにしなさい、ということです。また、このように祈っている
間、感謝をすることを忘れないようにしなさい、ということです。

使徒パウロは再び、コロサイの教会に対して個人的な奨励をしています。「同時に、私たちのためにも……祈

ってください」(4:3)。彼は当時、ユダヤ人の暴力的な反発の結果、ローマで囚人としての日々を送っていましたが、しかし、それでも、自らの聖なる召命と使命を見失ってはいませんでした。福音を宣べ伝えたいという情熱は、機会は非常に限られていたにもかかわらず、衰えてはいなかったのです。仲間のクリスチャンたちに祈りの要請をしているのはそのためです。信仰の指導者たちのために祈ることは、あらゆるクリスチャンにとって優先事項でなければなりません。事実、国王や大統領や知事に始まり、その下に続く公職にある人々など、指導者なら誰もが、私たちのとりなしを必要としているのです。

しかし、とりなすべき人々の中でも、誰よりもそれに値する（I テモテ 5:17-18 参照）、あるいは誰よりもとりなしを必要としているのは、福音を語る説教者たちです。彼らのメッセージは、政治家や王たちのものより重要だからです。パウロはコロサイの人々にとりなしの祈りを求めています、それは、自分がキリストの奥義をさらに力強い大胆さをもって語ることができるようにということなのです。クリスチャンならば誰でも、みことばを語る人々がその働きの中で、あらゆる限界と障害から解き放たれるよう、とりなすべきなのです。



「はっきり語れるように」とは、一見してわかる以上の意味を含んだ願いです。「はっきり語る」という意味に加えて、ギリシア語の「ファネロオー」には、「明らかにする」「知らせる」「教える」といった意味があります。パウロの願いは、福音を伝えるための扉が開かれるようにというだけではありません。それまでの世代には隠されていた奥義が、彼には既に啓示されていたわけですが（コロサイ 1:25-26 参照）、それを自分が宣べ伝える際にも、神ご自身がそれをわかりやすくしてくださるよう、という願いでもあるのです。パウロのこれらの願いはまた、福音を語る人なら誰もが、「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです」（ヨハネ 6:63）という主のみことばを思い出し、何より切に求めるべきものなのです。